

---

# 激ヤセ旅館

春野エックス

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

激ヤセ旅館

### 【Nコード】

N3122C

### 【作者名】

春野エックス

### 【あらすじ】

既に子供も大きくなって独立し、二人きりになった中年の夫婦。彼等にとって楽しみと言えば食べることにアレ位だろう。アレ、…そう、ダイエットである。究極のダイエットに挑戦したのだが…。元々はホラーの積りだったので、読み返してみると、余りに可笑しいのでユーモア・コメディの部類と考えています。従ってちよっぴりホラーっぽいところもあります。笑い転げて頂ければ成功です。そうでない場合には…失敗です、残念！！一人でも多くの人に大いに笑って、ちよっぴり怖がって頂ける様に願っています。

「今日会社で面白い噂を聞いて来たんだ」

ある会社をリタイヤし、関連会社にアルバイトとして雇用されてから数年になる相川幹夫は、妻の早苗に勢い込んで言った。

「面白い噂？ この間みたいな事じゃないでしょうね。最高に美味しいケーキ屋さんだって言うからわざわざ電車に乗って行ってみたら、とつくに潰れていたなんて、くたびれ損の骨折り儲けだったわよ」

「いや、今日聞いて来たのは、食べ物屋さんじゃないんだよ」

「じゃあ何のお話？」

「絶対に痩せられるっていう噂のある旅館の事だよ」

「痩せられる旅館？ 怪しいわね。断食道場の間違いじゃないの？」

「いや、名前も聞いて来た。楽珍旅館って言うんだよ。電話番号も聞いて来た」

「へえーっ、手回しが良いのね。ふーん、……」

早苗はまだ半信半疑である。

「もう随分旅行に行つてないよな」

「そうねえ、長男も次男もそろって県外で所帯を持つなんて、昔は考えられなかったけど、そんな事ってあるのね。一年にいつペン位しか帰って来ないんだからねえ。」

まあ、元気でやっているみたいだから良いんだけど、二人きりの旅行なんて何十年振りになるかしらね。でも、駄目よ！ お金が無いでしょう！」

早苗はつまらなそうに言った。しかし幹夫は今度は違つぞと、またもや勢い込んで話を続ける。

「車で小一時間位の所なんだよ。一泊二食付き税込みで五千円ポツキリ。二人で一万円ジャスト。露天風呂付き！」

「一万円は大きいわね。ガソリン代も掛るし。貴方の収入を知っているわよね」

「ま、まあそうだけど、ちょっと良い話があるんだよ」

「良い話？」

「ああ、そこはね、ダイエットが売りでね、もし一週間たつても全然痩せなければ、こっちで連絡すれば、もう一度無料で同じ曜日に宿泊出来るんだそうだ」

「ええっ！ それを早く言ってよ。それでもし、次の回にも痩せなかつたら？」

「何度でも無料で宿泊出来るんだそうだよ。それも勿論一泊二食付でね」

「だけどどうして一週間待つのかしら？ 待てば待つほど旅館側が不利になるでしょう？」

「それは多分一日で痩せなければ、毎日宿泊されて向こうが困るからじゃないのか？」

「ああ、成る程。全然痩せない体質の人だと、ずっと泊まりっぱなしになるものね。採算が取れなくて直ぐ潰れちゃうわね。」

でも一週間というのはよっぽど自信があるのね。……その話乗った！ こうなつたらただ飯を食いに行つてやる！ ガソリン代はどの位掛るかしら？」

早苗はすっかりその気になった。意気込みは夫以上である。

「軽乗用車だし、道も良いから、往復千円も掛らないと思うよ」

「ふふふふ、私達を痩せさせられるものなら、痩せさせてみるってね。露天風呂に入り放題で、二食付きなら十分採算が取れるわ。早速電話して」

「日にちはいつが良いかな？」

「今度の土曜日の晩でどう？ ああ、混んでるかしらね。丁度中秋

の名月の日だし、駄目だったら次の週の土曜日。それも駄目だったらその次の週の土曜日。兎に角、土晩にして」

「ドバン？」

「そう、土曜日の晩の事よ。毎週土曜日にそこに行く様にすれば、これから寒くなるから、ストーブの燃料代も浮くし、私は家事をしなくても良いし、一石二鳥か三鳥位になるでしょう？」

「成る程、俺も休みだからね。グッドアイデアだ！」

二人の息子が片付いた今となっては、相川夫婦の楽しみと言えば、何と言っても美味しい物を食べる事だった。そしてもう一つ、競い合っているダイエットがあった。

例えば五個ワンセットのチョコレート菓子等が県外にいる息子達から送られて来たとする、二つずつ食べて最後の一個が問題になる。

「愛する旦那様の為に、最後の一個は譲ってあげるわ」

「ふん、その手は食わないぞ。そうやって俺を太らせる積りなんだろうが、そうは行かない。俺は遠慮しておく。お前が食べれば良いだろう」

そんな風にして、互いに譲り合うのである。

しかし結局、

「ああ、しょうがないな。折角の贈り物を腐らせる訳にも行かないだろう。どれ、犠牲になつて俺が食つてやる。うーん、美味しい！」  
等と言って幹夫が、しかし美味そうに食べる事になるのである。

「ふふふ、勝った！ これで少し痩せるわ！」

そうは言っても少しも痩せない。それもその筈である。旦那の知らない所で、こっそり買い食いしているのだから。

幹夫は早速楽珍旅館に電話した。

「はい、こちらは楽珍旅館で御座います」

「ええと、予約したいんですけど」

「有難う御座います。早速ですが日時は……」

「今度の土曜日の晩なんだけど……、空いてますか？」

「はい、一部屋だけですが空いております。何名様で御座いませうか？」

「空いてる！ ああ良かった！ 私と家内の二人んですけどね」

「承知致しました。あのう、お名前の方は？」

「私は相川幹夫、それと家内は早苗です」

「はい。それで電話番号の方は？」

「ええと、電話番号は……」

「はい、かしこまりました。それではお待ち致しておりますので」

「ああ、ちよっと待ってください」

「はい？」

早苗が幹夫の前で口をパクパクさせて、指を自分の方に向けて、電話を代ってくれとしきりに合図している。

「家内が話したい事がある様なので、今代ります」

「はい、分かりました」

早苗は幹夫の言ったダイエットに関する事が本当かどうか確かめなかった。その他にもう一つ聞いておきたい事があったのである。

(2)

「先ず、料金なんだけど、一人五千円ポッキリというのは本当かしら？」

「はい、全て込みでそのお値段にして頂いております」

「ああそう、それなら良いんだけど。……それでお宅は、ダイエット効果が売りなんですよね？」

「はい、その通りで御座います。もし一週間経っても、減量されない場合は電話一本入れて頂けば、その日に来て頂いて結構です。無料でご宿泊出来ます」

「とすると、今度の土曜日に行つて、失敗なら次の土曜日にまた行つても良い訳よね」

「はい、勿論で御座います」

「ちゃんと食事も付くのよね？」

「ははは、食事無しという事は御座いません。安心しておいで下さい」

「そう、それなら良いのよ。それから……」  
早苗にしては珍しく躊躇った。

「何で御座いますよう」

「露天風呂の事なんですけどね、露天風呂はあるわよね？」

「はい、勿論御座います。二十四時間、健康に差し障りの無い程度になら、何度でも入つて頂けます」

「それでその、男女は別々よね？」

「いえ、そのう……」

「一緒なの？ だったら申し訳ないけどキャンセルするわよ。私そつというのって嫌いなもの」

「いえいえ、当旅館には三つの露天風呂が御座いまして、混浴も御座いますが男女別々のものも御座います。手前の方から、男性用、

混浴用、女性用となっております。

元々は混浴用しかなかったのですが、お客様の要望が御座いまして、三つに仕切らせて頂きました。仕切りはしっかりして御座いますので、覗かれたりする心配は御座いませんので、安心してお越し下さい」

「あー良かった！ それで一安心だね。それじゃあ、今度の土曜日の夕方頃に行きますので」

「はい、支度してお待ちしております。それでは失礼致します」

予約はすっかり出来た。早苗は電話の内容を一通り幹夫に話した。「なかなか感じの良い男の人だったわね」

「ああ、そうだな。でも良く露天風呂の混浴の事に気が付いたな」「貴方は混浴の方が良かったんじゃないの？ 若い女性の裸が見れて」

「まさか。見えるのは良いけど、見られるのがちょっと嫌なんだよね」

「ふふ、その立派なお腹じゃね」

「お前だつて人の事は言えないぞ。布袋様みたいな腹をしている」「そうなのよ、素敵な男性であればあるほど見られるのが恥ずかしいわ。だから私は混浴が大っ嫌いなものよ」

「ふーむ、珍しく意見が一致したな。当日は中秋の名月だよ。天気が良いといいね。露天風呂に浸かりながら満月を眺める。秋の夜だから涼しい風が木々の間を吹き抜けて行く。良いねえ、風情があるって」

「そうよねえ。おまけにスリムになって帰って来るんですから、最高だね。駄目ならまた行けるし、今年が良い事が余り無かったけど、どうやら運が向いて来たみたいだね、ふふふふ」

二人は良い事ばかりを想像していた。その気分は週末まで続いていたのである。

「いやーっ、こんな近い所にこんな良い所があるとはね、どうして今まで気が付かなかったのかなあ。噂も最近の事だしな」

「新しく出来た旅館なのかしら？」

「元々混浴だったものを直したんだろう？」

「ええ、そう言っていたわ」

「だったら、そう新しい訳ではなさそうだぞ」

「リニューアルオープン記念の特別サービスとか？」

「さあ、そこまでは聞いてないな。まあ行って見れば分かるさ」

「そうよね、ふふふ、楽しみ楽しみっ！」

土曜日の夕刻。愛用の軽の乗用車で二人は出掛けた。三十分ほど大きな通りを走り左へ曲がってから、山道になる。

しかし舗装がしっかりしている道路なので、ドライブは快適である。二十分ほどして少し高台に来た所からやや狭い道に入って、数分で目的地に着いた。

家を出て五十分少々で着いた割には意外に山は深い。車を降りて見ると見通しが全く利かず、すっかり森の中に迷い込んだ様に思えた。そこに平屋の粗末な旅館があった。

「ああ、ここだ。友達から聞いた通りの場所にあった。看板に『楽珍旅館』って書いてある」

「な、何だか、薄気味悪いわね。本当に大丈夫なのかしら？」

「ははは、考え過ぎだよ。あーっ！ 随分高い塀があるな。この先に露天風呂があるという訳か。それにしてもちよつと興ざめだな。

まあ、これなら、絶対覗かれないだろうけどね。しかし風情が……」

「うーん、でも、考えようだね。覗かれないという事は大事なことだもの」

「そ、そうだよな。まあ兎に角入ろうか」

「ええ」

予想していたイメージとは余りに違うので、大いに戸惑ったが、少なくとも怖いお兄さんの出て来る雰囲気では無いと思って、中に入った。

途端に二人とも思わず辺りを見回した。相当に古い建物である。掃除は行き届いている様だが全体がすっかり骨董品の様だった。

「いらつしやいませ」

古い建物に似つかわしい様な、旅館の名前の入ったはっぴ姿の番頭らしい男が現れて出迎えた。

「あのう予約していた相川ですが……」

「はい、お待ちしております、吉沢さん、お願いします」

声からすると出迎えた中年の痩せぎすの男が電話の主に違いなかった。

「はい、ただいま！」

奥の方から小走りにやって来た、和服の仲居らしい三十歳位の女性が幹夫の持つて来た鞆を持って、

「こちらで御座います」

と先を歩いて行った。やや大柄なその女性はかなり力がありそうである。さほど重くは無いいえ、幹夫の鞆が如何にも軽そうに見えるのだ。

玄関から廊下は右の方へほぼ真っ直ぐで、右側は壁、左側に部屋が幾つか並んでいる。その造りも何だか酷く殺風景である。

「こちらの薄氷の間で御座います」

「薄氷の間？ 変わった名前ですね」

「はい、ダイエツトに相応しい名前で御座いましょうか？」

「はははは、そ、そうだね」

仲居は顔立ちは可愛いが、怒ると何だか怖そうだった。

「さ、さっぱりした部屋だね」

襖を開けて中に入ると、テレビ、冷蔵庫、電話、テーブル、座椅子、お湯の入ったポットと茶碗等、一通りの物は揃っているのだがどれもこれも古い物ばかりで、装飾品も殆ど無く、一言で言えば、みすばらしかった。

しかし吉沢と呼ばれた女性は慣れているのか、何の感情も無く事務的な話に入った。

「皆さん、そう仰しゃいます。それであるの早速なのですが、料金の方、先払いとなっております。宜しいでしょうか？」

先払いと聞いて、相川夫妻は顔を見合わせた。旅館でもホテルでも、ごく一部の特別な場合を除けば後払いと相場が決まっているのである。

「か、帰ろうか？」

幾分顔をしかめて幹夫が小声で言った。

「そうねえ……」

早苗は少し迷った。その時仲居は膝を付いて正座し、両手を腿の上に置いて、じっと待つ姿勢を見せた。

それから両手を畳の上に着いて視線を二人に合わせ、

「あの、先払いとなっておりますので、どうか、お願い致します」  
柔らかい物腰で少し頭を下げながらそう言った。

「わ、分かりました。それじゃあ、これ」

幹夫は慌ててポケットから財布を取り出して一万円を手渡した。

「はい、有難う御座います。申し遅れましたが、私この女将をしております、吉沢京香と申します。宜しくお願い致します」

「仲居さんじゃなかったんですか？」

「仲居も兼ねておりますので、間違いでは御座いません」

「ああそうですか、どうも」

幹夫はペコリと頭を下げてから畳の上に座って胡坐をかいた。

「あのう、レシートは無いんですか？」

早苗も膝を折りながら強気に言った。

「はい、その前にここにどちら様かのサインをお願い致します」

「レシートが先よ」

早苗は尚も食い下がった。

「ああ、申し訳御座いません。この用紙が誓約書兼領収書にもなっていますので」

「ああそう、細かくコチャコチャと書いてあるわね。相川早苗、書

いたわよこれで良いのね」

「はい、有難う御座います。こちらがレシートとなっております」  
女将は用紙のミシン目に入った所から切り離して、領収書になっている部分を早苗に手渡した。

「あのう、それからお食事の件なのですが……」

「食事付でしょう？ それもお金を取るんですか！」

早苗はムツとした様子で言った。

「いいえ、その、コースが二つ御座いまして、フランスコースと日本コースの二つなのですが、どちらが宜しいでしょうか？ お二人様別々のコースでも宜しいのですが」

「ええっ！ フランスコース？」

フランスと聞いて早苗の態度はがらりと変わった。

「そ、そうねえ、私はフランスコースで行くわね。貴方は日本コースにしたら？」

「俺だつてフランスコースの方が……」

「じゃあ、私は日本コースにするわ。その方が色々食べられて良いじゃない」

「まあ、それもそうだな。じゃあ、フランスコースと日本コースと一人前ずつでお願いします」

「はい、かしこまりました。それであのう……」

「ま、まだ何かあるんですか？」

幹夫は早く寛ぎたかった。

「当旅館の仕来たりで、なるべく早く早く露天風呂にお入り頂きたいのですが」

「いちいちそんな事まで指図する訳！」

一度は収まった早苗の感情がまたぶり返した。

「はい！ ダイエットの為で御座います！ 必ず、必ず、痩せさせ

てみせます。その為に命を懸けております！」

女将の気迫は凄かった。それにはさすがの早苗もたじたじた。た。

「わ、わ、分かりました。じゃあ、直ぐお風呂に入ります」

「有難う御座います。浴衣はこの乱れ箱に入っております。大きい方は男性用、小さい方は女性用で御座いますので宜しくお願い致します。お食事の方はお二人が入浴中に支度させて頂きますので、それでは失礼致します」

女将は丁寧な頭を下げてその場を去って行った。

「ふーっ！ 凄い女将だったね」

「ええ、負けたわ。二度と来る気はしないけど、これだったら本当に痩せそうよ」

「そうだな。それじゃあ、浴衣に着替えて早速風呂に入るか」

「大きい方が貴方ので小さい方が私のね」

「うん。ありや、大きい方でもちよっと小さいぞ」

「そうね、私の方も小さ過ぎるわね。つんつるてんよ」

「電話してもつと大きいのに変えて貰おうか？」

「何だか無駄な気がするわね。『ダイエットの為に御座います。我慢して下さい！』何て言われそうだわ」

「それもそうだ、我慢出来ないほど小さい訳じゃないから、まあいっつか」

二人ともつんつるてんの浴衣を着て、まるで年のいったガキ大将のような感じで風呂場へ向かった。

「風呂場はここを出て左だったよな」

「ええ。突き当たって左へ曲がって直ぐ右に並んでいるって聞いたわよ」

「何だ、突き当たって左だったって、右へ行けやしないじゃないか」

「本当、廊下一本しかないものね。ああ、あつたわ、電話で聞いた

通りに、男湯が最初ね。じゃあ、上がったらどうする？」

「お前は長風呂だろう？ 待っていて風邪を引いてもあれだし、先に部屋に戻っているよ」

「それは良いけど、勝手に食事をしないでよ。美味しい物を先に食べて、知らん振りなんて無しよね」

「そこまで意地汚くないよ。横になって待っているから、なるべく早く上がって来れば良い」

「分かったわ。じゃあ、後でね」

「ああ」

幹夫は男湯の方に入って行った。

「次が混浴用で、その次が女性用ね。確かにあったわ」

早苗も露天風呂に入って行った。

ゆつくりと中秋の名月を眺めながら露天風呂に入って、つんつるてんの浴衣でも一応は満足して幹夫は風呂から上がった。

「それにしても狭かったな。家の風呂よりはそりゃ広いけど、ああ、やっぱりそうだ」

幹夫は廊下に出て、男性用、女性用は間口が狭く、混浴用が広い事に気が付いて納得した。

「本当に一つの風呂を三つに仕切ったんだな。しかも混浴用が一番広いんだ。でもまあ客が一人しか居なくて貸切状態だから、ゆつたり出来ただけど、変だな、確か一部屋だけ空いているって言ったよな。他の客は何処にいるんだ？」

静かな廊下を一人首を傾げながら幹夫は部屋に戻って行った。

「ええと、薄氷の間だよな」

廊下の右側にズラリと入り口が並んでいて、何番目だったか良く分からなくなったので入り口の上の方に書いてある部屋の名前を見ながら、歩いて行った。

「ああ、あつたあつた、ここだ。何だかちょっと違う様な気もするけどね……」

襖を開けて、中に入ってビックリした。

「あれ？ 何にも無いぞ？」

確かにあつた筈のテレビ等の調度品や、自分達の脱いだ服、テーブルすらも無い。部屋の奥の隅に玩具の様な物が二つ重ねてあるだけである。

「変だな？」

おかしいと思つて、一旦部屋の外に出てみた。

「確かにここが薄氷の間だ。念の為に隣の部屋も調べてみようか。

ここは霧氷の間。こっちは樹氷の間になっているぞ」

両隣を調べてみても部屋の名前も違つし、こっそり開けてみようとしたが全く開かなかつた。

『どうなっているんだ？』

結局、元の部屋に戻つてみた。がらんとした部屋の少し奥の、何枚か重ねた紙の上に、小さな丸いパンの様な物が四つ置いてあつた。

「何だこれは？」

手に取つて見ると、それは正しくパンであつた。その時、

「ギーッ、ガチャン！」

何かが閉まる音がした。

「な、何の音だ？」

幹夫は振り向きはしたが、それっきり音は聞こえなかったし、目の前のパンが気になっていたので、行って見はしなかった。

「敷いてある紙に何か書いてあるぞ。何々、これが今夜の夕食と明日の朝食で御座います。フランスパンはフランスコース、アンパンは日本コースで御座います、な、な、何だって！」

カツとなって、

「ば、馬鹿にしゃがって。幾らダイエットの為だと言っても限度がある！ も、文句をつけてやる！」

幹夫は走って廊下に出て行った。右へ行けば帳場がある。

「えっ！ 何だ、塞がっているぞ！ そう言えばさっきの音はこれだったんだ。ええい、畜生！」

力を込めて押したがびくともしない。防火扉の様なものらしい。

「はーっ！ 駄目だ全然動かない」  
諦めて部屋に戻った。紙にはまだ何か書いてあったので、それを読んでみる事にした。

「ええと、他に食事は一切御座いませんで大切に食べ下さい。トイレは部屋の隅におまるが二つ用意してあります。紙はこれをお使い下さいって、なんじゃこりゃー！！」

幹夫は絶叫した。その後しばし呆然としている所に、

「ああーっ、いい湯だった。ちょっと狭かったけど、お月様が綺麗だったわ……」

何も知らずに早苗が帰って来た。

「あらっ？ どうしたの？ 何にも無いじゃない」

「こ、これが食事だそうだ」

「えっ、何これ？ 小さいパンが四個あるだけじゃないの！」  
早苗の目付きが険しくなった。

「ああ、フランスコースがフランスパン、日本コースがアンパンなんだってさ。今夜の分と明日の朝の分と二つずつ。食事はこれだけなんだって」

「……………」

早苗はちよつと目眩がした。フランスコースは当然フランス料理、日本コースは当然日本料理だと信じて疑わなかったのだ。

「それでね、トイレは……………」

「そうそう、トイレは何処にあるの？ 探したんだけど無いのよね。部屋の中にも無さそうだし」

「トイレは部屋の隅におまるが二つ用意してあるんだそうだよ、紙はこれを使えって」

幹夫はパンの下に敷いてあつた紙を指差した。

「な、何それ！」

早苗が呆れて叫んだ。その時また、

「ギーッ、ガチャン！」

戸の閉まる音がした。

「ああっ！」

思わず叫び声を出して、幹夫は走って廊下に出てみた。今度は左側、露天風呂の方の防火扉が閉じていた。

「ええっ！ どうなっているのこれ！」

後を追つて来た早苗も叫んだ。幹夫は『完全に閉じ込められた！』そう思った。

「開けて！ 開けて！」

早苗は防火扉を叩いて叫んでみたがしんと静まり返っていて、何の音もしない。二人は諦めて部屋の中に戻った。

暫く沈黙が続いた後で、

「話が上手過ぎると思つたんだよな」

幹夫ががつくり来た様子で言った。

「ねえ、これって監禁じゃないの？」

「言われて見ればそうだよな。ひょっとして俺達は罠にはまったのか？」

「きつとそうよ。今頃子供達に身代金要求の電話かなんか、行っているんじゃないのかしら？ 一億円出せとか何とか」

「しかし、県外だし、子供達の事は何も話して無いぞ」

「それもそうだけど……」

「それに、俺達は金持ちじゃないし、息子達だって金持ちじゃない。普通狙わねえだろう？」

「あんたが罠だって言ったんじゃないの」

「うーん、考え過ぎなのかな？」

何が何だかさっぱり分からず、また暫く沈黙が続いた。

「あーっ、あれこれ考えたら、お腹が空いたわね。このパン食べましょうか？」

「でも、毒か何か入っているんじゃないのか？」

幹夫は冗談めかして言った。

「そうかも知れないわね。じゃあ、私が犠牲になって、全部食べてあげる」

「ま、待て。犠牲になるのは俺だけで良いだろう？ 俺が全部食べてやるよ」

「私よ！」

「俺だ！」

二人は争う様にして結局フランスパンとアンパンを一個ずつ食べた。

「ああ、結構美味いじゃないか」

幹夫は舌で唇の周りに付いた僅かのおんこも舐め取って飲み込んだ。勿論早苗もそうした。何があっても食欲だけは旺盛な二人だった。

「ああ、美味しかったわね。でも明日の分まで食べちゃったのね」  
「しょうが無いだろう、こんな一口で無くなる様なパンなんだから」  
「そうねえ。あーあ、これだったら家に居た方がましだったわね」  
「そうだよな。ああ、トイレに行きたくなかった。俺は廊下の右の方  
でやるから、お前は左の方でやれば良いよ」  
「分かったわ。つまりいたりしない様にしてね。零したら大変だから」  
「お前もな」

廊下の右の防火扉の前には幹夫のおまるが、左のそれには早苗のおまるが置かれる事になった。

それから何もする事が無く部屋の中にと眠気が差して来た。

「しょうが無いから寝るか？」

「そうしよう」

早苗が押入れを開けて布団を取り出すと妙な事に気が付いた。

「あれ？ 掛け布団が一つきりしか無いわ。毛布も何にも無い！」

「ええーっ！ 何処まで俺達を苦しめれば気が済むんだ！」

二人は何とかしてここを逃げ出す方法を考え始めていた。

「廊下の方からじゃ出られないけど、窓があるわよね」  
早苗は声を潜めて言った。何と無く誰かに聞かれている気がしたからである。

「そつだよな。直ぐ庭だし逃げれば逃げられそつだぞ」  
幹夫も調子を合わせて声を潜めた。

「行こうか？」

「うん」

幹夫が先に立って、抜き足差し足で窓に向かった。

「スーッ」

出来るだけ静かに二重になっている窓を開けた。

「スーッ」

二つ目の窓も開けた。外は暗闇である。

「ゴンッ！」

幹夫の頭が何かにぶつかり、

「痛てえっ！」

頭を押さえた。

「壁になつてる！こりゃあ写真が貼つてあるんだ！」

「ええっ！」

早苗も小さく叫びながら、景色に触つてみた。

「あらっ、本当だわ」

「そつか、分かつたぞ」

「何が？」

「あの女将が、早く風呂に入れと言つたらう？」

「ええ」

「きつとこの窓のトリックが見破れない様にする為だったのさ！」

幹夫は悔しそうに叫んだ。

「ああ、そうねえ、馬鹿に急いでいたものね。そんな訳があったのね。まんまと一杯食わされたわ」

二人は諦めて部屋の真ん中辺りに戻って来た。

「もしここで火事になったら私達死んじゃうわよ」

「その前に餓死するさ。飲み水さえないんだぞ。三日と持たないよ」

「あーあ、短い一生だったわね。死ぬ前に世界三大珍味を思いつ切り食べてから死にたいわね」

「お前は食う事ばかりだな」

「じゃあ、貴方は死ぬ前に何がしたいの？」

「最高級のステーキを腹一杯食べて、赤ワインを飲んで、中トクの寿司を食べて……」

「やっぱり食うことじゃないの！」

「あははは、そうだな」

しばし沈黙。

「あーっ、お腹が空いたわね。起きていると辛いから眠りましょうか？」

「そうだな、仕方が無い、掛け布団一枚でも、掛けて寝るか？」

「あら、私、トイレだわ。この部屋何だか寒くなって来たわよ」

「そう言えばそうだな。俺が布団を敷いておくからして来いよ」

「悪いわね、直ぐ済むから、この紙貰って行くわね」

早苗が部屋を出て直ぐ、幹夫は一枚きりの掛け布団を敷いた。余り大きくない掛け布団である。

「小さくて二人一緒に寝るんじゃ無理だな」

幹夫が思案していると早苗が戻って来た。

「お待たせ、あら、小さい布団ね。これじゃあ、一緒に寝るのは無理ね。いいわ、貴方が寝て。私はここで横になっているから」

「いや、お前が寝れば良いよ。あれっ、何か生暖かい風が吹いて来たみたいだぞ。何か変だな」

部屋の中の妙な風に幹夫が首を捻っていると、

「ズズズッ！」

何かを引き摺るような音がして、

「ああっ！」

二人一緒に小さく叫んだ。

「変だな、お前今布団の中で寝たか？」

「あんたこそ、何時布団から出て来たのよ？」

畳の上に敷いていた布団がまるで誰かが寝ていたかのように膨らんでいた。人がこっそり抜け出したかのような形のまま残っている。無論中は空洞である。

「変だな、俺はここにいたぞ」

「あたしだってここから動いていないわよ」

二人がちよっとした言い争いをしていると、

「ズシャッ！」

音がして、布団は平らになった。

「あれ？」

「どうなっているのかしら？」

二人とも首を傾げていると

「ズズズッ、ズシャッ！」

平らだった布団が人型に盛り上がりまた平らになった。

「ええっ！！！」

二人とも叫び声を挙げた。

「ズズズッ、ズシャッ！　ズズズッ、ズシャッ！」

今度は二度連続してその奇妙な現象が起こった。

「な、何だこりゃ？」

「や、止めてよ！」

二人とも顔が引き攣った。

「ズズシヤ、ズズシヤ、ズズシヤ、ズズシヤ」

布団は今度はすっかり平らになる前に後ろからウエーブが掛つたみたいに、膨らみが前に移動して、ジリジリと二人のいる方向に寄つて来るではないか。

「キヤーツ！！」

早苗は後ろに飛び退き様絶叫した。

「ウワアア　！！」

幹夫も大声で叫んで後退りした。布団の前方の方が上下して、まるで怪物の口が開いたり閉じたりしている様だった。

「ズズシヤ、ズズシヤ、ズズシヤ、ズズシヤー！！」

布団の移動速度は段々速くなり、最後は飛ぶ様にして二人を襲った。

「ひーっ！！」

間一髪で二人は別々に横の方に逃れ布団の後ろに回りこんだ。

「ズズシヤ、ズズシヤ、ズズシヤ、ズズシヤー！！」

掛け布団は前も後ろも無いのか、そのまま後退して二人を追いかけて来た。

「ウワー！！」

二人は何とか逃れた。部屋の中をあっちへ逃げ、こっちへ逃げしているうちに段々疲れて来た。

「駄目だ、もう捕まる。ああ、短い人生だったな！」

幹夫は怪物に食われる覚悟を決めた。ゆとりがあれば廊下に逃げ出すのだが、掛け布団の怪物はまるで知能があるかの様に二人を廊下には逃さないのだ。

「ズズシャ、ズズシャ、ズズシャ、ズズシャー!!!」

布団の怪物がまたもや飛び掛って来た。

「えーい!!!」

幹夫は思いっきりジャンプして布団の上に飛び乗った。

「バッテリー!!」

殆ど大の字になって掛け布団の上に乗った幹夫は布団と共に畳の上に落ちた。結構大きな音がしたが、大の字になったことが幸いして音の割にはダメージは少なかった。

「痛てててててっ!!」

「だ、大丈夫?」

「ま、まあ何とかな。あれ? 布団が動かないぞ?」

「本当ね。どうしてかしら?」

二人は緊張した面持ちで暫く様子を伺ったが、掛け布団は全く動かなかった。

「……人が乗つてると動かないんじゃないのか?」

「そうかも知れないわね。ふうっ、でも疲れたわ」

早苗はそう言うと、その場にぺたんと座り込んだ。

「ああ俺も疲れたな。どうやら布団の上に乗つてると動かないみたいだから、お前もここにきて寝ればいい」

「そうさせて貰うわね。ああっ、こんな薄っぺらい布団でも、無いよりましなのね。あーっ、疲れたわ……」

結局二人ともそのまま寝てしまった。

数時間後、体が冷えて来て、幹夫は目を覚ました。

「うーっ、冷えるな。何かトイレに行きたくなってきたぞ。仕方が無い行くか」

幹夫は重い足取りで廊下へ出て右側にある自分のおまるで用を足した。部屋に帰ろうと思つて振り向くと、防火扉らしい分厚い扉が少し開いている事に気が付いた。

「ええっ! 開いてる! 待てよ、露天風呂の方から逃げられない

かな？ そつだ早苗を起して一緒に逃げよう！」

幹夫は静かに襖を開けて

「おい！ 早苗！ 起きろ！」

声を潜めて、小さく叫んだ。

「だ、誰？」

早苗は少し寝惚けている。

「起きろ！ 防火扉が少し開いているんだ。 露天風呂の方だけど」

「ええっ、開いてるっ！」

「シート！！ 声大きいよ。兎に角こっちへ来いよ」

「でも、私が動くと、この布団も動き出すんじゃないの？」

「走って来れば大丈夫だよ。直ぐ襖を閉めるから」

「わ、分かったわ。一、二の、三！！」

「ダダダダダッ！」

早苗は掛け声を自分で掛けて、飛び起きてから一目散に廊下に出た。

「スーツ、バチン！！」

幹夫は勢い良く襖を閉めた。

「おまるを寄せて置いた方が良さな。下手をすると引っ掛けるぞ」

「うん。これで良いかしら？」

早苗は廊下の中央に置いていた自分用のおまるを左端に移動した。

「うん、そこなら大丈夫だろう」

「布団は別に暴れていないみたいだね。全然音がしないもの」

「そついえば静かだな。……兎に角露天風呂の方へ行ってみよう」

「ええ、ああ、何だか喉が渴いて来たわ」

「本当だ、カラカラだ。それじゃええと、押してみるぞ」

「うん、一人で大丈夫？」

「やってみるよ。うーん！！」

幹夫が押すと防火扉はゆっくりと壁側に開いた。開け切ると壁に

ほぼピッタリ収まるようになってる。

「上手く出来ているわね。でもこれが独りでに動く筈はないわね。あの力のありそうな女将が怪しいわね」

「電話に出たあの男じゃ、力が無さそうなものな。何の為にこんな事をするのか分からないけど、とんだ食わせ物だったな」

二人は連れ立って露天風呂の方へ歩いて行った。

「さて、どっちに入る？」

「誰もいないみたいだから、混浴用の方に入りましょうか？」

「ああ、そうだな。結局俺たちしかないようだし、風呂に入る訳じゃないしな」

「上手く脱出出来ると良いんだけど」

「何としてでも脱出しなければな」

「うん、じゃあ戸を開けるわよ」

「ああ」

二人が戸を開けても、予想通り誰もいなかった。つんつるてんの浴衣のまま二人は風呂場に入って行った。

「ああーっ！！ 駄目だ！」

幹夫はがっかりした声を上げた。

「凄い崖になっているわね、さっき入った時には気が付かなかったけど」

露天風呂の向こう端は転落防止の為のフェンスがあるが、その下は高さが十五メートル以上の崖になっていた。二人の帯や浴衣を結び付けても、地上までは到底届きそうも無い。

「ひよつとしてあれかな、浴衣が小さいのも脱出防止の為なんじゃないのか？」

幹夫は閃いた様に言った。

「ああーっ！ 成る程ね、どつりでつんつるてんでおかしいと思っ

たわ」

二人はすっかり落胆したが急に喉の渴きを思い出した。

「どうせ飲むんだったら、少しでもミネラル分の入った温泉水を飲もうかしら？」

「そうだな、その方が一日位は長生き出来るんじゃないのか？」

ここの温泉水は蛇口から出る様になっていて、沢山飲める様に温度も低めにしてある。側のコンクリート製の台の上に陶器製のマグカップが三個置いてあった。二人はそれを銘々手に持って、蛇口を捻って簡単に洗ってから、温泉水を代わる代わる注いだ。

「ああーっ、でも良いお月様ね。ごくっ、ごくっ、ごくっ！」

「そうだなあ、こんな良い中秋の名月を見るのは、何年振り、いや何十年振りかだろうね。ごくっ、ごくっ、ごくっ、ふーっ、喉が渴いていたから何とも美味しい！」

「空腹をこれで紛らわすしかないわね。ごくっ、ごくっ、ごくっ！」

「全くだ。ごくっ、ごくっ、ごくっ、ごくっ！」

中秋の名月を眺めつつ二人は何杯もお代わりをして温泉水を飲み続けた。

「ふう、飲んだ、飲んだ！」

「ああ、もう飲めないわ。お腹が一杯！」

二人とも温泉水で膨らんだお腹を擦った。

「さっきまで平らだったのに、また膨らんじやったわね」

「ああ、そうだな。おおつ、寒くなって来た。部屋に戻るか？」

「嫌よ、あの布団嫌い」

「じゃあ脱衣場の方へ行くか？　ここにいたら風邪を引くぞ」

「どうせ、餓死するんだから、ここで風邪を引いてもどうって事ないわ」

「だけどな風邪は苦しいぞ、……しょうがない、俺は温泉に入る。

どうせ誰も居ないんだからここで入っても良いよな」

「そうね、じゃあ私も入るわ。せめて月を眺めてから死にましよう」

二人は脱衣場に行き、浴衣と下着を脱いで素っ裸になって戻って

来て、露天風呂に入った。熟年夫婦同士、羞恥心など殆ど無い。第

一異性だと思っていない。湯に浸かりながら長々と話し始めた。

「俺達は太っているから飢えには強いんじゃないか？」

「聞いたことがある。体に蓄えがあるから、こういう時には太っている方が長く持つって」

「それに温泉水がたっぷり飲めるから、餓死するまでには一ヶ月位は掛るんじゃないか？」

「えーっ！　一ヶ月も掛るの！　腹減るわねーっ！」

早苗はがっかりした。一ヶ月も空腹に耐えられないと思った。

「でもその間に、何とか助かるんじゃないか？」

「どうして？」

「月曜日に無断欠勤するんだぜ。お前だってパートを無断欠勤する事になる。家に連絡しても無しをつぶてだ。段々大騒ぎになる。」

車で出掛けた形跡がある。俺に情報をくれた野村君がここに俺達が来た事を警察に言うだろう」

「警察に言うかしら？」

「ああ、俺はここに行く積りだつて言つたしな。一週間位で警察はここに来るんじゃないのか？」

「その前に私達は殺されちゃうんじゃないの？」

「うっ！ その手があつたか」

「……さあ、上がるわよ。少しのぼせて来たわ」

「うん、俺も上がる」

二人は何もする事が無く、風呂場用のイスに腰掛けて、互いの腹の具合を鑑賞したりしていたが、

「ポン、ポン！」

幹夫が自分の腹を叩いてみると、実に良い音がした。

「ポン、ポン！」

次いで早苗も自分のお腹を叩いてみた。温泉水が一杯詰まった腹の鳴り具合は絶妙でなんと良い音である。暫く叩いてみていたが、

「うっ、寒い！ 入ろう」

「私も！」

寒さを感じて風呂に入った。しかし今度は直ぐ上がって、また温泉水を一杯飲んでから改めて二人一緒にフェンスの所へ行つた。

「ここから横へ抜けられれば良いんだけど、高い塀があつてとても無理だしな。覗き防止用といっても本当は逃げ出されない様にするんじゃないのか？」

「ああ、そうかも知れないわね。結局露天風呂側からは脱出出来ない様にしてあつたんだ。まんまと罠にはまっちゃったのね、私達」  
どうしても逃げ出せないと悟って、二人とも暫く沈黙した。

「ここで腹を叩けば、麓の街に聞こえるんじゃないのか？」

ふと思いついて幹夫が言った。

「そうねえ、でも分かってくれるかしら？」

「変な音がすると思うんじゃないのか？」

「成る程、長時間鳴っていれば、調べに来る人があるかも知れないわね」

「ああ、しかしあいつらが殺しに来るかもな」

「それは無いんじゃない？」

「何故だ？」

「さつき随分良い音をさせていたから、殺しに来るんだったら、とつくに来ているわよ」

「それもそうだな、じゃあやってみるか」

「うん！」

こうして二人の腹鼓の合奏が始まった。

「ポン、ポン、ポポポン！」

幹夫のリズムに、

「ポポン、ポン、ポン！」

早苗が受ける。

「ポ、ポ、ポポン、ポ、ポ、ポポン！」

幹夫がリズムを変えると

「ポポポツ、ポポポツ、ポポツポン！」

早苗も変えて調子を合わせる。熟年夫婦の呼吸はピッタリ合って、なかなかの名演奏だった。中秋の名月の下で腹鼓を打つ二人は、まるで満月の夜に浮かれて出て来た古狸の夫婦が人間に化けているかの様だった。

寒くなると温泉に浸かり、小用はお湯の排出口辺りでやってまた

温泉水を飲む。また腹鼓を打つ。二時間近くもそうしていたがさすがに疲れて来た。

「そろそろ限界ね、嫌だけど部屋に戻りましょうか？」

早苗は叩き続けて真つ赤になった腹を撫でながら言った。

「うん、そうだな、腹も減っているけど眠くなっちゃったよ。もう限界だ」

二人はよろけながら脱衣場に戻り、タオルで体を拭いてから下着を着、浴衣を羽織った。足取りのおぼつかない二人は支え合う様にして部屋の前まで来た。

「あれ？ おまるが無い」

早苗は端に寄せた自分のおまるが無い事に気が付いた。

「あれ？ 俺のも無いぞ」

「誰かが片付けたんじゃないの？」

「多分あの女将じゃないのか？」

「どうなのかしら？ 兎に角部屋に戻ってみましょうよ」

「うん。薄氷の間、ここに間違いない」

幹夫は名前を確かめてから襖を開けて部屋に入った。早苗も続いて入った。

「ああーっ！」

二人一緒に驚きの声を上げた。そこは最初に来た時と家財道具などが同じ状態で、その上ちゃんと床が二つ並べて敷いてあった。敷布団も掛け布団も毛布も枕までもが揃っていた。

二人は顔を見合わせたか、今度は掛け布団が動き出す気配は無い。余りに疲れていたのか、直ぐ床に入って二人とも眠ってしまった。

(8) 最終回

「あーっ、朝か。鳥のさえずりが聞こえる。何時間寝たんだ？ それにしても、寝ている間に何か体が誰かに動かされた様な気がしたけどな。あれは夢だったのか？」

幹夫は寝ている間の事が夢か現実か良く分からなかった。それほど熟睡していたのである。

「起きた？」

目を覚ましたばかりの早苗が幹夫の方を向いて言った。

「えーっ！」

またも二人とも一緒に叫んだ。確かに昨夜は普通の布団に入って眠った筈である。しかし今見るとボロボロの掛け布団である。敷布団もボロボロ、枕も毛布もだった。しかも何やら茶色の毛が沢山落ちていている。

「ウワァーッ！ 気味悪い！」

二人は飛び起きて枕元に置いてあった、自分達の着て来た服に着替えた。

「服はあったわ、ああ、私のバックも、貴方の鞆もある」

「ウワァーッ、この部屋全部がボロボロだぞ。何だこりゃ、狸の毛か？ 兎に角逃げよう！」

「うん！」

二人が襖を開けると、昨夜は閉まっていた玄関や帳場のある方の防火扉はすっかり開いていて、逆に露天風呂の方の防火扉は閉じていた。やはり廊下におまるは無かった。小走りに廊下を行くと来た時とは違って、荒れ果てている。

「うひゃーっ、来た時には綺麗だった筈だよな」

「そうねえ、私達、狐か狸に化かされたのかしら？」

「ま、まさか、でもひよつとすると……」

直ぐに玄関に着いて、脱いだままになっている靴を大急ぎで履くと、一度だけ振り返って、誰も居ない事を確認してから外に出た。

愛用の軽自動車に飛び乗って、必死の思いで帰宅した。財布の中身も車のガソリンの量も全く確認する余裕は無かったのである。

「ふふふ、上手くいったわね」

二人が車に乗ってほうほうの体で逃げ出したことを確認して、帳場に現れたのは女将の京香である。

「ああ、しかし結構疲れるな」

しんどそうに言うのはこの主人青木次郎だった。

「しょうがないわよ、必要経費を一日千円以下に抑えるにはこれ位しかないのよね。お陰で今までやって来れたんですから」

「でもなあ、ガソリンを抜き取ったり、財布の中身を枯葉に摩り替えるというのはちょっと、犯罪だし……」

「大丈夫よ、ここでの話を何て言うの？ 掛け布団が襲って来たって言うの？ トイレが無かった、おまるで用を足したって言うの？

普通の旅館があら家に変わったって？」

京香は自信満々である。

「へへへ、兄さんは気が小さい」

玄関から現れたのは、幹夫の会社のアルバイトの野村だった。

「三郎、だ、誰かに見られなかったか？」

「大丈夫だって。もう次のアルバイト先は決まったし、またカモを見つけてここに來させるからさ。しかし、部屋のトリックが見破れる奴はいないだろうね」

「絶対大丈夫よ、ここに来るのは一回限りなんだし、幾つも並んでいる部屋を三つだけ使って表札だけ変えてるなんて気が付かないわ

よ。

入り口も中も家財道具なんかは違うけど、造りは同じ。何が何だか訳が分からないと思うわ。最後に寝ている所を動かすのがちょっとしんどいけど、まあその位は努力しないとね」

「しかし、今回の掛け布団の動きは凄かったな」

改まった感じで次郎が言った。

「あら、狸の毛から作った形状記憶繊維を使って、動く布団を作った御本人の操縦が一番上手だったんじゃないの？」

京香は意外だという風に言った。

「それにしても熱風で上手く動くもんだね。兄貴の頭の良さは大したもんだ。上から吊るすんじゃないあ、とつくにばれてるしね」

「部屋のうちこちらからノズルで熱風をリモートコントロールして動かすんだけど、何時もはあんなに上手く行かないんだけどな」

次郎はちよつと首を傾げた。

「夫婦の気が合っているから上手く行つたんじゃないのか。リモコンは二人で隣の部屋から覗き穴で見ながらコントロールするんだろっ？」

「そつよ、動きが複雑で大変なのよ。まさか掛け布団が飛ぶとは思わなかったわ」

「ええっ！ お前がやったんじゃないのか？」

「あら？ 私は貴方がやったって思ったけど？」

「変だな、まあ偶然という奴か。さて、次の力モを向かい入れる準備をしなくちゃな。まずは玄関の掃除からだ」

次郎は、吹っ切れた様に言った。三人は真面目な(?)犯罪者だった。

それから半年ほど後の事である。夕食後に寛いでいた相川幹夫は気になる新聞記事を見つけた。

「ええと、何々、ええっ！ 元温泉旅館で三人惨殺？」

「元旅館って？」

「ら、楽珍旅館！」

「どれどれ！」

早苗も新聞を覗き込んだ。

「ああ、ニユースの時間だ。テレビをつけてみよう」

暫くしてその関連のニユースが始まった。

「元温泉旅館の楽珍旅館で、通り掛った人が三人の半ば白骨化した遺体を発見致しました。発見したのは地元の名探偵です。」

無人の筈のこの元旅館で、しばしば奇妙な物音を聞いていて、思い切って入ってみたところ、布団にぐるぐる巻きにされた遺体を発見しました。

巻き方が非常に強く、三人とも身動きが取れずに、餓死したものと思われまふ。尚詳しい死因は今後の遺体解剖によって判明するものと思われまふ。

この三人は指名手配中の詐欺グループ、青木次郎とその妻京香、弟の三郎と見られており……」

新聞には記事だけで写真が無かったが、テレビの画面には三人の顔がデカデカと映し出された。

「ああーっ！ あいつ等だ！ それにこいつは野村！」

「野村って、あの貴方に楽珍旅館を勧めた男よね。辞めたって聞いたけど、グルだったのね！」

「どうりで！ あれはやっぱり狐や狸に化かされたんじゃないかなかったです！」

「そうよ、れつきとした犯罪だったのよ！」

「損害賠償は無理か」

「三人とも死んだんじゃないか……」

その後で、遺体を発見した人のインタビューがあった。

「その時の経緯をお聞かせ下さい」

「はい、もう半年位前になるんですがあの楽珍旅館の方から、狸の腹鼓みたいな音が二時間位聞こえて来まして、地元じゃあ大変な話題になっていたんです」

「狸の腹鼓ですか？」

「はい、それも二匹、夫婦狸と言いますか、良い調子で聞こえて来たんですよ」

「しかし、御伽噺おとぎばなしならいざ知らず、狸が腹鼓を打ちますかね？」

「多分、相当の古狸、まあ、化物狸だろうって専らの評判でした」「それでどうされました？」

「皆怖がって誰も寄り付きはしませんよ。私もそうでした。ところがその次の日からぱったりと聞こえなくなっただんです」

「聞こえなくなっただ？」

「ええ、それまでは、狸の腹鼓こそ無かったけど、何やら物音は色々していたんですが、何にもしなくなりました」

「へえーっ、それは変ですね」

「そうなんですよ、それで気に掛けてはいたんですが、怖くてねえ、そばを通つても中を調べる勇気が無かったです。でも数日前とうとう入ってしまったんです。半年何にも無いんだから、多分大丈夫だろうってね」

「そしたら遺体があつた訳ですね」

「はい、三人は小さな掛け布団一枚に巻かれていたんです」

「小さな掛け布団一枚？」

「そうですね、奇妙な光景でした。見ようによっては三人はその布団に食われていた様にも見えるんですよ」

「ええっ、まさか！」

「いえいえ、きっとそうですね。それで動けなくなつて餓死したんじゃないかと……」

「へえーっ、信じられないお話ですね」

「私だつて信じられませんか」  
「今日は貴重なお話を有難う御座いました。これでインタビューを終ります」

相川夫妻は顔を見合わせた。自分達の腹鼓が逆効果になっていたのだ。しかもとんでもない事になっている。

「私達は化物狸に思われているようよ」

「ああ、酷い話だ。これじゃ恥ずかしくてとても名乗り出られないぞ」

「そうだわね、良い勉強になったと思つて諦めるしかないわね」

「うん。ただ一応痩せたよな」

「そうそう、すっかりスリムになったわ」

「一週間だけな」

「そうなのよ、あの後、約束どおり一週間で痩せていなければもう一度行く積りになっていたのにな」

「ああ、酷い目にあつたけど、確かに痩せたからな」

「八日目からだわ、少しずつ太りだしたのは」

「うん、そうだった。二週間目にはすっかり元に戻つたからな」

「いつその事あの掛け布団に食われれば良かったかもよ」

「そいつは駄目だろう」

「どうして？」

「次の日の朝に狸の毛らしいものが落ちてたよな？」

「ええ、そう言われれば何か毛がごっそ落ちてたわね」

「俺の推理じゃ、あの掛け布団は狸と因縁があるんじゃないのかな？」

「ええつ、うーん、どうなのかしら？」

「俺達が狸だと思つて、たとえ食つても、共食いだと感じて吐き出すんじゃないのか？」

「まあ、酷いわね。でも案外そんな所かもね」

あれほどの事があつたのにも拘らず、僅か二週間ですっかり元の体形に戻つた二人の肥満パワーは、人を食らう化物狸かもしれない妖怪掛け布団でも逃げ出す様な迫力があつた。

勿論二人は相変わらずダイエツトに精を出しているが、伝説の様になつている化物狸の腹鼓を生み出した、見事な狸腹は未だに健在である。

完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3122c/>

---

激ヤセ旅館

2009年3月24日09時55分発行